

土蜘蛛

前

ツレ

胡蝶

シテ

僧形の者

トモ

頼光従者

ツレ

源頼光

ワキ

郎等の一人

後

ワキ

前に同じ

ワキヅレ

隨行者

シテ

蜘蛛の精靈

季は

雑

地は

前は京都

後は大和

ツレ次第

「浮き立つ雲の行方をや。く。風の心地を尋ねん。

サシ 「是は頼光の御内に仕へ申す。胡蝶と申す女にて候。

詞 「さても頼光例ならず惱ませ給ふにより。典薬の頭より御薬を持ち。唯今頼光の御所へ参り候。いかに誰か御入り候。

トモ詞 「誰にて御座候ふぞ。

ツレ 「典薬の頭より御薬を持ちて。胡蝶が参りたるよし御申し候へ。

トモ 「心得申し候。御機嫌を以て申しあげうするにて候。

頼光サシ 「こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の。浮世にめぐる身にこそありけれ。げにや人知れぬ。心はおもき小夜衣の。恨みん方もなき袖を。かたしきわぶる思ひかな。

トモ 「いかに申し上げ候。典薬の頭より御薬を持ちて胡蝶の参られて候。

頼光 「こなたへ来れと申し候へ。

トモ
「畏つて候。此方に御参り候へ。

ツレ
「いかに申し上げ候。典薬の頭より御薬を持ちて参りて候。御心地は何と御入り候ふぞ。

頼光
「昨日より心もよわり。身も苦しみて。今は期を待つばかりなり。

ツレ
「いや／＼それは苦しからず。病ふは苦しき習ひながら。療治によりてなほる事の。ためしは多き世の中に。

頼光
「思ひも捨てず様々に。

地
「色をつくして夜昼の。／＼。境も知らぬ有様の。時のうつるをも。おぼえぬほどの心かな。げにや心を転ぜず。其まゝに思ひ沈む身の。胸を苦しむる。心となるぞ悲しき。

シテ一聲
「月清き。夜半とも見えず雲霧の。かゝれば曇る心かな。

詞
「いかに頼光。御心地は何と御座候ふぞ。

頼光

「ふしぎやな誰とも知らぬ僧形の。深更に及んで我を訪ふ。其名はいかにおぼつかな。

シテ 「愚の仰せ候ふや。惱み給ふも我脊子が。来べき宵なりさゝがにの。

頼光 「蜘蛛のふるまひかねてより。知らぬといふに猶ちかづく。姿は蜘蛛の如くなるが。

シテ 「かくるや千筋の糸すぢに。

頼光 「五体をつゞめ。

シテ 「身を苦しむる。

地 「化生と見るよりも。く。枕にありし膝丸を。

抜き開きちやうと切れば。そむくる所をつゞげざまに。足もためず薙ぎ伏せつゝ。得たりやおうとのゝしる声に。形は消えて失せにけり。く。(中入)したる御事にて候ふぞ。

頼光 「いしくも早く来たる者かな。近う來り候へ語つて

ワキ詞

聞かせ候ふべし。さても夜半ばかりの頃。誰とも

知らぬ僧形の來りわが心地を問ふ。何者なるぞと

尋ねしに。我せこが來べき宵なりさゝがにの。

蜘蛛のふるまひかねてしるしもといふ古歌をつらね。

即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて。我に千筋の糸を
繰りかけしを。枕にありし膝丸にて切り伏せつる

が。化生の者とてかき消すやうに失せしなり。是

と申すもひとへに剣の威徳と思へば。今日より膝

丸を蜘蛛切と名づくべし。なんぼう奇特なる事に
ては無きか。

ワキ

「言語道断。今に始めぬ君の御威光剣の威徳。かた
ぐ以てめでたき御事にて候。また御太刀附のあ
とを見候へば。けしからず血の流れて候。此血を
たんだへ化生の者を退治仕うするにて候。

賴光

「畏つて候。(中入)

「土も木も。我大君の國なれば。いづくか鬼のやどりなる。其時一人武者すゝみ出で。彼塚にむかひ大音あげていふやう。是は音にも聞きつらん。頼光の御内に其名を得たる一人武者。いかなる天魔鬼神なりとも。命魂を断たん此塚を。

地「崩せや崩せ人々と。呼ばゝり叫ぶ其声に。力を得たるばかりなり。下知に従ふ武士の。く。塚をくづし石をかへせば。塚の内より火炎を放ち。水

をいだすといへども。大勢くづすや古塚の。あやしき岩間の陰よりも。鬼神の形は顯はれたり。

後ジテ
「汝知らずや我むかし。葛城山に年を経し。土蜘蛛の精魂なり。猶君が代に障をなさんと。頼光に近づき奉れば。かへつて命を断たんとや。

「其時ひとり武者すゝみ出で。

地「其時一人武者すゝみいでゝ。汝王地に住みながら。

君を悩ます其天罰の。剣にあたつて悩むのみかは。

命魂をたゝんと。手に手を取り組みかゝりければ。
蜘蛛の精靈。千筋の糸を繰りためて。投げかけ
く白糸の。手足にまとはり五体をつゞめて。斃
れ伏してぞ見えたりける。

「然りとはいへども。

地
「しかりとはいへども。神国王地のめぐみを頼み。
彼土蜘蛛を中にとりこめ。大勢みだれかゝりけれ
ば。剣の光に少しおそるゝ氣色を便りに。切り伏
せく土蜘蛛の。首打ちおとし悦びいさみ。都へ
とてこそ帰りけれ。